

2023 年度 入学試験問題

国 語

(第 3 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次のⅠ、Ⅱ二つの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(文章Ⅰ)

セスナの中で、ぼくは大事にそれを抱かかえていた。少しふたからしみ出したのか、狭せまい機内にかすかな匂においがただよっている。北極圏ほっきょくけんの村、アンブラーを飛び発たち、セスナはフェアバンクスに向かっていた。世話になった友人のエスキモーの家族から、フェアバンクスのアラスカ大学で学ぶ娘むすめにそれを渡わたしてほしいと頼たのまれていたのである。セスナが大きく揺ゆれるたびに、こぼさないよう両手でバランスをとっていた。それはまだ温ぬくもりのあるカリブーのスープだった。窓ガラスに ヒタイaをつけ、眼下aに広がるアラスカの原野を眺ながめながら、ずいぶんと昔のことを思い出していた。

それはもう十五年前、ぼくがアラスカ大学の学生こころの頃ころだった。

(中略)

その後、アラスカの旅が始まり、多くのエスキモーやインディアンしゅりょじんの村を訪れた。狩猟民しゅりょじんとはぼくにとって全く新しい人々だった。いつだったか、早春のベーリング海の流水で、南から渡ってきたケワタガモの大群を、エスキモーの人々と見たことがあった。春の訪れを告げるそのヘンタイbの美しさにぼくは見とれ、そのわきで、彼らかれは舌なめずりをしながら銃じゆうをかまえている。頭の中は久しぶりのダックスープの味で一杯いっぱいなのである。この自然観の違ちがいが可笑おかしかった。狩猟民のもつ自然との関わり、世界観に、ぼくはすこしずつ魅ひかれていった。

ポイントホープの村で見たエスキモーのクジラ漁は、狩猟民に対する強烈きやうれつな印象をぼくにうえつけた。アザラシの皮で作ったウミアックを漕こぎ、氷の亀裂きれつで出来たリードという氷海の中で、巨大きょだいなクジラを追う。それは言葉に言い尽つくせない体験たいけんだった。何よりもうたれたのは、彼らが殺すクジラに対する神聖な気持ちだった。解体かいたいの前に祈いのり、そして最後に残された頭骨を海に返す儀式ぎしき……それはクジラ漁にとどまらず、カリブーやムースの狩猟でも、さまざまな形で人々の自然との関わりを垣間かいま見ることができた。

ぼくは^①狩猟民の心とは一体何なのだろうかと、ずっと考え続けていた。自然保護とか、動物愛護という言葉には何も魅まかれたことはなかったが、狩猟民のもつ自然との関わりの中には、ひとつの大切な答があるような気がしていた。それはもしかしたら、狩猟生活が引き受けなければならぬ **A** 性と関係があるのかもしれない。たとえば、クジラ漁は、リードがすべてである。

春、凍こおりついたベーリング海に、風と チョウリュウcの力により少しずつ亀裂が入ってゆく。その氷に囲まれた海をリードと呼ぶのだが、クジラ漁は、そのリードが大きく過ぎても小さ過ぎても成り立たない。それどころか、氷は常に動き続け、目の前でリードそのものが消えてしまうこと

がある。つまり、さまざまな自然条件がうまく重なって、初めてエスキモーのクジラ漁が可能になるのである。それはおそらく、あらゆる狩猟に共通する宿命なのだろう。しかし、狩猟生活が内包する A 性が人間に培うある種の精神世界がある。それは、人々の生かされているという想いである。クジラにモリを放つときも、森の中でムースに出合ったときも、心の奥底でそんなふうに見えるのではないだろうか。

私たちが生きてゆくということは、誰を犠牲にして自分自身が生きのびるのかという、終わりのない日々の選択である。生命体の本質とは、他者を殺して食べることにあるからだ。近代社会の中では見えにくいその約束を、最もストレートに受けとめなければならぬのが狩猟民である。約束とは、言いかえれば血の匂いであり、悲しみという言葉に置きかえてもよい。そして、その悲しみの中から生まれたものが古代からの神話なのだろう。

動物たちに対する償いと儀式を通し、その霊をなぐさめ、いつかまた戻ってきて、ふたたび犠牲になってくれることを祈るのだ。つまり、この世の掟であるその無言の B に、もし私たちが耳をすますることができなければ、たとえ一生野山を歩きまわろうとも、机の上で考え続けても、人間と自然との関わりを本当に理解することはできないのではないだろうか。人はその土地に生きる他者の生命を奪い、その血を自分の中にとり入れることで、より深く大地と連なることができる。そしてその行為をやめたとき、人の心はその自然から本質的には離れてゆくのかもしれない。

セスナはフェアバンクスに着いた。何と、アラスカの原野を五〇〇キロも越えての、カリブースープの出前である。さつそく友人の娘に電話する。

「ジェニファ、今、アンブラーの村から帰ったばかりなんだ。お父さんから渡すように頼まれたものがあるんだよ。当ててみな！」

受話器のむこうで、ジェニファはしばらく考え込んでいる。そのカリブーの肉は、ジェニファの兄、アルヴィンが獲ったものだった。スープはすっかり冷めてしまったが、それはジェニファの身体に懐しい原野の血を流し込むことだろう。

〔星野道夫『旅をする木』より〕

（文章Ⅱ）

大工は建物を造るのに木を使いますな。木なしには日本のカオクは考えられませんし、伽藍もそうですな。技術的には木の性質を知らなんだら本当は木は使えませんわな。それで私は木の扱いに関してはやかましゅう言うんですわ。これは当たり前ですな。それさえ知らん人もおりますがな。口伝にも木の扱いに関してはいろいろ教えております。

「堂塔建立の用材は木を買わず山を買え」

「木は生育の方位のままに使え」

「堂塔の木組みは木の癖で組め」

いずれも木の使い方の心構えを説いたものですな。要は自然の教えるままにしなさいと言うているわけです。その自然に対する心構えというのがどうしても大事になりますな。ものを扱うのも技術も、心構えなしには育たんもんですわ。

(中略)

私は古代建築のことしか知らんし、それしかしてこなかった。古代の人の魂を汚さないように努めてきた。そのなかで、自分はもうどうしたらいいか考えたんです。口伝はもうした自然のことを考える手がかりだったんですな。

なにしろ私たちの仕事は、材料が自然に育てられた木でしょう。それも千年以上も命を永らえてきた木ですわ。その千年以上も永らえてきた木を使って、自然の大地の上に建物を建てるんですな。私の仕事なんていうのはちっぽけなもんでっせ。この自然の流れのなかで、木を伐って建物に変えるのやから、できるだけ命を永くせな、私の意味がありませんわな。③それが仕事ですわ。だから自然を無視して仕事はできません。

大袈裟なようですが、大工にも自然観が必要なんです。自分より大きな自然というものに対してきちんとした考えを持たなあかんですよ。木を見るにしても、すぐにこれはなんぼの木や、これは五十年しかたつとらんから安い、これは千年やから高い、これではあきませんな。

やっぱりたった一本の木でも、それがどんなふうにして種が播かれ、時期が来て仲間と競争して大きくなった、そこはどんな山やったんやろ、風は強かったやろか、お日さんはどっちから当たったんやろ、私ならそんなことを考えますもんな。

それで、その木の生きてきた環境、その木の持っている特質を生かしてやらな、たとえ名材といえども無駄になってしまいますわ。ちよつとしたCのなさが、これまで生きてきた木の命を無駄にしてしまうことになるんやから、われわれは十分に考えななりませんわ。

こういうことは農学校を出て、一、二年、百姓をやらされて初めてわかりましたな。自分で育てたものは無駄にしませんし、植物は育てるのにえらく手間やら時間やらがかかるんです。また手かけたただけ大きくなるんですな。そして植物が育っていく、その一つ一つの段階にそれなりの歴史があるんです。

それに自然には、急ぐとか早道みたいなもんはないですからな。春に植えた稲は秋まで育てんと実がつきませんがな。人間がいくら急かしても焦つても、自然の時の流れは早ようなりませんのでな。急いだら米は実らんし、木は太うならん。

④昔の宮大工が百姓大工やったというのは理想的な姿かもしれませんな。

自分で米や野菜を作って、仕事があるときに精一杯やる。私らもそうでしたけど、裏の山には檜の木が植えてありまして、自分の手斧の柄や鉤の台なんかは自分の山から伐った木を、長く納得がいくまで乾燥させてから使いましたものな。自然に密着した生活と仕事、こないやったら自然のことは決して忘れはしませんわな。

それと百姓大工をしてたら食えるから、待つこともできますわな。一度余裕をなくして儲けを

追い出したら、時間を待つこともできんし、休むこともできんし、どうしても「早く、早く」ということになりますな。

今の人はみんなそうなってしまいました。そのうえ仕事こまが細こう分業になって自然とのつながりがわからなくなってしまうたんですな。大工でさえ木がどこで育てられ、どんな育ち方をしたのかさえ見わけようがない。そんな木を使つかこうて、上から早く早くといわれるし、自分でも少しでも早ようしようとしてますやろ。そんな生活にどっぷり漬つかかっていますから、自然のことを生活や仕事の場で思い出そうというても無理ですわ。

まあ、こんな時代ですが、ちゃんとした仕事をしようと思つたら自然のことを忘れたらあきませんわ。どんなにしても人間は自然しんから逃にげられませんし、その自然のなかでは木や草とそんなに変わらしませんのやから。

(西岡常一『木のいのち木のころ(天)』より)

問1 〜〜線 a ~ d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らん に入る最もふさわしいことばを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 多様
- 2 偶然ぐうぜん
- 3 独創
- 4 客観

問3 空らん に入る最もふさわしいことばを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 苦しみ
- 2 憐れみあわ
- 3 悲しみ
- 4 慈しみいづく

問4 空らん に入る最もふさわしいことばを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 気配り
- 2 向上心
- 3 学識
- 4 決断力

問5 ——線①「狩猟民の心」とはどのようなものですか。文章Iより十二字でぬき出して答えなさい。

問6 ——線②「この世の掟」にあたる行為とはどのようなことですか。文章Iより十一字でぬき出して答えなさい。

(問題は次のページに続きます)



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子貢は、その日、大きく胸を張って、腹の底まで朝の大き気を吸いこみながら、ゆつたりと、大股に歩いていった。彼は、このごろ、いい役目にありついて、日ましに金廻りのよくなって行く自分のことを考えて、身も心もおのずと伸びやかになるのであった。

（先生は、顔回の米櫃の空なのを、いつも讃められる。そして、天命をまたないで人為的に富を積むのを、あまり快く思っていないらしい。しかし、腕のある人が、正しい道をふんで富を積むのが、何で悪かろう。自分に云わせると、貧乏はそれ自体悪で、富裕は善だ。第一、金に屈托がないと、楽々と学問に専念することが出来る。それに、何よりいい事は、誰の前に出て、平生通りの気持で対応が出来ることだ。貧乏でいたころは、どうもそうは行かなかったようだ。）

彼は、数年前までの、苦しかった時代のことを思い出して、何度も首を横にふった。

（あの頃は、貴人や長者の前に出ると、変にぎごちなく振舞ったものだ。むろんそれは、自分の貧乏ツたらしい姿を恥じたからではない。そんな事を恥じるほど弱い自分でもなかったようだ。その点では、子路にだって負けないだけの自信を、自分もたしかに持っていた。ただ、自分は、少しでも相手に媚びると思われなくなかったのだ。貧乏は仕方がないとして、そのために物欲しそうな顔付をしているように見られたら、それこそおしまいだし、かといって、礼を失するような傲慢な真似も出来ないのです、つい物腰がぎごちなくならざるを得なかったのだ。今から考えると不思議のようだが、貧乏という事実がそうさせたのだから仕方がない。やはり貧乏はしたくないものだ。）

（それにしても――。）

と、彼は急に昂然と左右を見まわしながら、心の中でつぶやいた。

①（とにかく自分が何人にもへつらわなかったことだけは、まぎれない事実だ。この点で自分は貧困に処する道を誤らなかつたと公言しても差支えあるまい。先生だって、恐らくそれを許して下さるだろう。）

彼はいつの間にか、孔子の家のすぐ近くまで来ていた。

見ると、門の外に、三人の若い孔子の門人たちが、うやうやしい姿勢をして立っている。彼等は、丁度門をくぐろうとしていたところに、子貢の姿を認めたので、わざわざ歩みをとどめて、彼を待っていたものらしい。三人とも、数年前の子貢と同じように、ごく貧乏な人たちばかりである。

三人は、子貢が彼等のまえ二間（約三・六メートル）ほどのところに近づくと、弟子の礼をとつて、いともいんぎんにお辞儀をした。子貢も、殆どそれに劣らないほどの丁寧さで彼等にお辞儀をかえした。そしてほんの数秒間、途を譲りあつたあと、先輩順に門をくぐることにした。子貢がその中の大先輩であつたことはいままでもない。

門をくぐり終えて子貢は考えた。

（先生はかつて、貧乏で怨まないことと、富んで驕らないことでは、貧乏で怨まないことの方が難かしいと云われたが、必ずしもそうとは限らない。富んで驕らないことの方が却ってむずかしいとも云えるのだ。だが、いずれにしても自分は大丈夫だ。現にたった今も富んで驕らないことを事實に示すことが出来たのだから。）

堂に上った時の彼の顔は、太陽のように輝いていた。彼は、自分ながら、自分の顔をまぶしく感ずるくらいであった。そして、みんなの集るいつもの暗い室にはいると、多くの弟子たちの顔が、青白い星のように、ちらちらと彼の眼の下にゆれていた。しかし、彼は、孔子が未知の世界そのもののように、端然と正面に腰をおろしているのを見ると、少しあわて気味に、型どおり挨拶をすまして、自分の席についた。

彼のあとについてはいつて来た三人も、隅っこの方に、それぞれ自分達の席を定めた。

前からのつづきらしい礼の話が、それから一しきりはずんだ。今日は、ごく自由な座談会めいた集りだったためか、孔子は別にまとまった話をしなかった。むしろ、みんなの云うことに聴き入っているという風であった。しかし、誰かの言葉に少しでも上ずったところや、間違ったところがあると、孔子は決してそのままには聞き流さなかった。彼の批判はいつも厳しかった。その厳しさは、しかし、ふんわりと彼の愛を以て包まれていた。

子貢は、言論にかけては、孔門第一の人であったが、今日は不思議にも沈黙を守っていた。第一彼は、人々の話をあまり注意して聴いてはいなかった。彼の心は、今日途々考えて来たことを、うまい言葉で披瀝して見たい考えで一ぱいだったのである。

「子貢は珍しく黙っているようじゃな。」

孔子が、とうとう彼を顧みて云った。

子貢は虚をつかれて、一寸たじろいたが、すぐ、この機を逸してはならないと思った。彼はこれまで、自分の意見に少しでも不安なところがあると、先ず孔子一人だけの時にそれを述べて、批判を乞うことにしていた。それは、多くの門人たちに、自分のつまらぬところを見せたくなかったからである。しかし、今日の彼は、十分自信にみちていた。自分の考えは実行に裏付けられているという誇があった。孔子の助言なしに完成した自分の意見を、孔子をはじめ沢山の門人たちに聴いてもらう愉快さを思って、彼は内心得意にならないではいられなかった。彼はそれでも、

「私は、只今の皆さんのお話が一応すみました上で、少し別のことについて、先生のお考えを承りたいと存じておりますので……」

と、③ 自分を制しながら答えた。

「そうか。……なに、もうそろそろ話題をかえてもいい頃だろう。」

子貢は嬉しかった。彼は、しかし、すぐには口を切らなかった。得意になっている様子を人々に見せてはならない、と思ったからだ。

「一たい、君の問題というのは、何かね。」

孔子は、もう一度彼をうながした。そこで子貢は立上つて、彼一流の爽やかな口調で云つた。

「私は、このごろ、貧富に処する道について、多少考えもし、体験も積んで来たつもりでありますが、というのが、その極致で、それが実践出来れば、その方面にかけては、先ず人として完全に近いものではないかと存じます。」

「いや、それこそさつきからの話の礼と密接な関係をもつた問題じゃ。……で、君にはそれが実践出来たというのか。」

「それは、先生はじめ皆さんの御判断にお任せいたします。」

子貢は、しかし、自信たっぷりな面持だった。そして、さつき彼と一緒に門に入って来た三人の青年に、そつと視線を向けた。

「なるほど、貧富共に体験をつんだという点では、君は第一人者じゃな。」

子貢の耳には、孔子のこの言葉は、一寸皮肉に聞えた。しかし、孔子がみだりに皮肉を云う人でないことを、彼はよく知っていたので、次の瞬間には、それを自分が讃められる前提であると解した。

「君が、貧にしてへつらわなかつたことも、富んで驕らないことも、わしはよく知っている。」

そう云つた孔子の口調は妙に重々しかった。子貢は、讃められると同時に、撲りつけられたような気がした。

「それでいい。それでいいのじゃ。」

孔子の言葉つきはますます厳肅だった。子貢は、もうすっかり叱られているような気になつてしまつた。

「だが——」と孔子は語をつづけた。

「君にとつては、貧乏はたしかに一つの大きな災いだったね。」

子貢は返事に窮した。彼は、今日途々「貧乏はそれ自体悪だ」とさえ考えて来たのであるが、孔子に真正面からそんな問いをかけられると、妙に自分の考えどおりを述べる事が出来なくなつた。

「君は、貧乏なところは、人にへつらうまいとして随分骨を折っていたようじゃな。そして、今では人に驕るまいとして、かなり氣を使っている。」

「そうです。そして自分だけでは、そのいづれにも成功していると信じていますが……」

「たしかに成功している。それはさつきも云つた通りじゃ。しかし、へつらうまい驕るまいと氣を使うのは、まだ君の心のどこかに、へつらう心や驕る心が残っているからではあるまいかの。」

子貢は、その明敏な頭脳に、研ぎすました刃を刺こまれたような気がした。孔子はたたみかけて云つた。

「むろん、君の云うような道を悪いとは云わない。しかし、それはまだ最高の道ではないのじゃ。貧富に処する最高の道は、結局貧富を超越するところにある。君がへつらうまいとか驕るまいとか苦心するのも、つまりは貧富を氣にし過ぎるからのことじゃ。貧富を氣にし過ぎると、自然そ

れによって、他人と自分を比べて見たくなくなる。比べた結果がへつらい心や驕り心を生み出す。そこで、それを征服せいふくするために苦心しなければならぬ、ということになるのじゃ。」

子貢は固くなつて聴いてゐるより仕方がなかった。

「そこで、貧富を超越するということじゃが、それは結局、貧富を天に任せて、ただ一途いちずに道を樂たのみ礼を好む、ということなのじゃ。元来、道は功利的、消極的なものではない。従つて、貧富その他の境遇きようぐわいによつて、これを二三すべきものではない。道は道なるが故に樂み、礼は礼なるが故に好むと云つたような、至純な積極的な求道心があつてこそ、どんな境遇にあつても自由無礙じゆうむわいに善処することが出来るのじゃ。顔回にはそれが出来る。彼はさすがに賢者けんじやじゃ。そこまで行くと、貧にしてへつらわれないとか、富んで驕らないとかいうことは、もう問題ではなくなる。」

「先生、よくわかりました。」

と、子貢は、自分の未熟な考えを、みんなの前でうかうかと発表した軽率さを恥じる心と、孔子の言葉から得た新たな感激とを、胸の中で交錯こうさくさせながら、頭こころを垂たれた。

(下村湖人『論語物語』より)

問1 ——線 a 「屈托がない」・b 「いんぎんに」のここでの意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- | | | | |
|---|-------|---|-------|
| a | 屈托がない | 1 | だらしない |
| | | 2 | 未練がない |
| | | 3 | 心配がない |
| | | 4 | 関心がない |
| b | いんぎんに | 1 | えらそうに |
| | | 2 | かんたんに |
| | | 3 | だるそうに |
| | | 4 | ねんごろに |

問2 ——線①「貧困に処する道を誤らなかつた」とありますが、子貢は貧困の中でどのよう配慮してきましたか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分が貧乏であることではかにされないよう、礼儀には人一倍気をつかつてきた。
- 2 金持ちにはなるべく会わないようにし、引け目を感じるような場面をさけてきた。
- 3 どのような場面でも貧乏であることを隠かくし、金持ちであるかのようにふるまつた。
- 4 相手がどのような立場の人物であつても、他人におもねることだけはしなかつた。

問3 ——線②「太陽のように輝いていた」とありますが、ここでの子貢の気持ちの説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 孔子からすれば、金持ちになることばかりこだわっている今の自分は好ましく思えないだろうが、学問に専念するという高い志ゆえの行動であり、孔子も自分を評価してくれるはずだと自信に満ちあふれている。

2 孔子からすれば、豊かになった今の自分は言う事を聞かない煙たい存在であるだろうが、今では門人の誰よりも世間から評価されているのだから、孔子も認めざるを得ないはずだと自信に満ちあふれている。

3 孔子からすれば、豊かになった今の自分は好ましく思えないだろうが、ただ豊かになっただけでなく、その中でも謙虚さを忘れていない自分はむしろ人間として立派ではないかと自信に満ちあふれている。

4 孔子からすれば、金持ちになった今の自分は好ましく思えないだろうが、孔子は自分の若い門人への対応を見ているので、金持ちになっても立派に行動できる人間だと認めてくれるはずだと自信に満ちあふれている。

問4 ——線③「自分を制しながら答えた」とありますが、これはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 この場で貧富に対する自分の考えを発表すれば孔子も顔回より自分がすぐれていると認めてくれるはずだと興奮したが、言い方を間違えると顔回をほめることにつながってしまうかもしれないと思ったから。

2 貧富に対する自分の考えをこの場で発表すればみんなから一目おかれるはずだと興奮して気持ちがはやったが、適切な機会をのがさず最も効果的なたちで自分の考えを述べようと思ったから。

3 この場で貧富に対する考えを発表することで自分の考えが広がり、一門はさらに発展するはずであると興奮して気負ったが、勢いで話をしてしまうと逆にみんなをしらせさせてしまうと思ったから。

4 貧富に対する自分の考えをこの場で発表することでみんなから羨望の眼差しを受けられることに興奮したが、他の弟子たちの気持ちも考えると前に出過ぎるのはよくないと思っただから。

問5 ——線④「頭を垂れた」とありますが、この時の子貢の説明として最もふさわしいものを

次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の考えはみんなから賞賛されるものと思っていたが、逆にその未熟な点を指摘してきされたことで、自らをふがいなく思うと同時に改めて孔子の大きさに感服している。
- 2 自分の考えはみんなから賞賛されるものと思っていたが、孔子に相談もせずに表示したことを厳しく注意されてしまい考えの内容にまでふれてもらえず悔くやしく思っている。
- 3 自分の考えはみんなから賞賛されるものと思っていたが、逆にその未熟な点を完全に否定されたことで、自分がまだ半人前であることを思い知らされて絶望ぜつぼうしている。
- 4 自分の考えはみんなから賞賛されるものと思っていたが、それを遠回しに否定し、自分に恥はじをかかせまいと考えてくれる孔子の優しさに感謝している。



問6 次に挙げるのは、この文章を読んだ生徒と教師の会話である。これを読んで後の1～6の中から文章の内容としてふさわしくないものを二つ選び、番号で答えなさい。

生徒A ——先生、この物語は中国の古典の『論語』をもとに書かれているのですよね。

教師 ——そうだよ。『論語』の中では孔子は子貢の問いかけに対してその考えを認めただよ。

えで、「未だ貧にして楽しみ、富みて礼を好む者に若かざるなり」と言っているよ。

生徒B ——それ、どういう意味ですか。

教師 ——「まだ貧しくても人の道を楽しみ、裕福になっても礼儀や規範を大事にする人には及ばない」という意味だよ。このもととなった古典の意味もふまえて文章について自由に話し合ってください。

1 生徒A ——「貧乏でも人の道を高める」というふうに行動できるというのはすごいこと

だよ。顔回という人はどんな境遇にあってもこのことが実践できているから孔子の信頼が厚いんだね。

2 生徒B ——そうだね。だから貧乏であってもお金持ちになっても自分以外の人のことを気にしてしまう子貢のことをいませめているよね。

3 生徒C ——子貢が孔子の家に入った時に孔子の様子を見て、少したじろいでいるように読み取れるのは、子貢が自分の考えに不安を感じているとも見ることができるよね。

4 生徒D ——その後孔子は子貢が裕福になるために努力をして成功を収めたことに関しては手放しにほめたたえているけど、「人の道を高め」ていないことに関しては厳しく批判しているしね。

5 生徒C ——でも「裕福になっても礼儀や規範を大事にする」という点では子貢が年下の門人に丁寧に接している場面も書かれているし、子貢は礼儀を大切にしていると見てもいいんじゃないかな。わざと道を譲り合って孔子にその姿を見せているしね。

6 生徒D ——どちらにせよ孔子の考えとしては貧乏であることや裕福であることというのはたいして大切なことではないということだよ。他人と自分を比べるのではなく、自分自身を見つめていくことが大切だということを言いたいたいんだと思うよ。

問7 空らん にはどのような内容が入りますか。文中のことばを使って二十字以内で考えて答えなさい。

(問題は次のページに続きます)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

海がとても遠いとき

それはわたしの危険信号です

わたしに力の溢れるとき

海はわたしのまわりに 蒼い

※ おお海よ！ いつも近くにおいて下さい
シャルル・トレネの唄のリズムで

七ツの海なんか ひとまたぎ

それほど海は近かった 青春の戸口では

いまは魚屋の店さきで

海を料理することに 心を砕く

まだ若く カヌーのような青春たちは

ほんとうに海をまたいでしまう

海よ！ 近くにおいて下さい

かれらの青春の戸口では なおのこと

※シャルル・トレネ……フランスのシャンソン歌手

『現代の詩人 7 茨木のり子』より

問1 この詩の題名としてふさわしいものになるように、次の空らん□にあてはまることを詩の中からぬき出しなさい。

海を□に

問2 ——線「おお海よ！」とありますが、「！」にこめられている思いとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 驚きおどろ 2 願ねがい 3 感動 4 失望

問3 第四連・第六連に使われている表現技法を次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 反復法 2 倒置法たうち 3 直喩法ちよくゆ 4 対句法たいく

問4 この詩を解説したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 青春時代に何度も行った海をなつかしく思っており、そんな海を忘れかけている自分に危険信号を感じている。
- 2 青春を海にたとえて失われた時をいとおしむとともに、とりもどすことのできない青春を忘れようとしている。
- 3 青春は過ぎ去っていくものだが、海のようなその力強さを若者にも自分にも息づかせておきたいと思っている。
- 4 青春時代を過ごした海からは遠くはなれてしまったものの、せめて自分だけでも若さを保ちたいと考えている。

4 ①～⑤の空らんに入れるのにふさわしいことばを答えなさい。ただし、空らん一つにひらがな一字が入るものとします。また、《 》は、答えとなることばの意味を示しています。

① 本音を見抜^{みぬ}かれた弟は

か

 にいやな顔をした。

《包み隠^{かく}さずはつきりと》

② 来週^{らいしゅう}の祭りには

び
し

 人出^{ひとで}が予想^{よそ}されている。

《非常に多い》

③ 言葉^{ことば}が

つ

 ために気持ち^{こころ}がうまく伝え^{つた}られない。

《まずい。へたな》

④ あの話^{わがし}は本当^{まこと}にあったことなのか

ぶ

 ものだ。

《疑^{うたが}わしい》

⑤ 問^とい詰め^{つめ}られた容疑^{ようぎ}者は

ろ
ど

 の返答^{こたへ}をした。

《まどまりがなくしりめつれつ》

